

「技術フォーラム'02米子」参加報告

(株)新東京ジオ・システム 瀬野 孝浩
基礎地盤コンサルタンツ(株) 新田 洋一

はじめに

今年の全地連主催「技術フォーラム」は、中国地質調査業協会の協力、国土交通省中国地方整備局の後援のもとで鳥取県は米子市にて開催された。

期間は、9月26日～9月27日の3日間であり、JR米子駅にほど近い「米子コンベンションセンター“ビッグシップ”」を会場に、全国から500名を超える参加者が集まり、盛大に催された。東北地質調査業協会からも宮川理事長をはじめとし、技術委員会を中心に3名が参加した。



会場となった「ビッグシップ」

「技術e-フォーラム」として

本フォーラムでは、昨今のIT化の流れの中で、大会名称を「技術e-フォーラム2002」として、予稿集や発表の電子化を前面に打ち出した大会であった。

まず、例年かなりの厚さになる予稿集をCD-ROMとして参加者に配布することで、コストダウンとコンパクト化を図っている。参加者はCDの中のアブストラクトを参考にして、聞きたい発表の予稿を印刷し持参することになるが、内容をすべて確認することはなかなか大変であり、興味を引く発表を探すのに手間取ってしまった。また、予稿を持参しなかったり、開かなかった人も多いようで、今

後の課題と思われた。

次に、発表はすべて「Power Point」を使って行われたことである。これまで

もPPを使用しての発表はあったものの、今回はすべてPPの使用が義務づけられた。そのため、会場での見やすさは格別であり、発表者の工夫を凝らした内容と相まって、非常にわかりやすい発表となった。これは今後も継続していこうと思う。



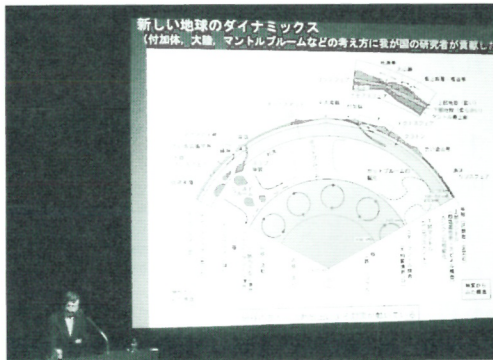
1. 開会挨拶

開会に当たっては、主催社を代表して全地連技術委員長である大谷 暁氏から挨拶があった。挨拶の中で、e-フォーラムとしての主旨と全面導入を目前とした建設CALS/ECについて述べられた。また、アメリカの震災復興のシンボリック建造物であるゴールデンゲートブリッジを例に挙げ、地盤工学の未来に夢を託し、マニュアルにとらわれない本物の技術に裏打ちされた、現場に密着した地質調査技術者の活躍と技術の発展を訴えられた。

ちなみに、地盤工学の夢とは、「技術、防災、環境、データベース、機器開発」の5つである。

2. 特別講演（オープニング講演）

特別講演は一般発表に先立って行われ、「未踏の地球深部への挑戦—新しい深海掘削計画—」と題して、平 朝彦氏（海洋科学技術センター深海地球ドリリング計画（OD21）推進本部長）が講演された。



平先生による講演風景

内容は、「新しい地球システム変動論を構築し、人類の未来を開拓し、地球との共存の指針を得るために、そのアプローチとして最も直接的かつ強力な方法としての、海洋底からの地球深部の掘削」についての紹介であった。その手段として、水深4000mの深海底から7000mの掘削能力を持つ掘削研究船「ちきゅう」を建造中であり、2006年初頭にはテスト航海を開始する予定とのことであった。それによって、次の3点が可能となるそうである。



進水した「ちきゅう」(2002.1.18)

- (1) 海洋底地殻全体やマントルを初めて採取し、地球システムを構成する物質の本質を明らかにする。
- (2) 地球内部から表層にかけての諸現象のモニタリングを行う。
- (3) 海底の地層に残された地球システム

変動の記録を克明に解読すること。いかにも壮大な夢の実現が始まっているのである。

詳しくは「海洋科学技術センター」HPに紹介があります。

<http://www.jamstec.go.jp/jamstec-j/odinfo/>

3. 技術発表会

特別講演の後、技術発表会は1日半にわたって行われた。発表論文数は一般セッションが126編、オペレーターセッションが7編の合計133編に及んだ。

発表は5つのセッションに分かれて行われたが、いずれの会場も満席状態で立ち見も出る盛況ぶりで、現場に即したものや研究的なもの、新しい機器の開発など、技術者にとっては皆興味をそそられるものばかりであった。遠隔地での開催にも関わらず、当協会員の発表も数編あり、これからの期待を抱かせるもので、大変心強く思い、協会派遣の我々は盛大な拍手で労をねぎらった。



技術発表会(一般セッション)

4. 全地連活動報告

内容は、「建設関連産業展開戦略」、「地質調査業の21世紀ビジョン」、

「CALS/ECの動向と今後の展開」について報告された。厳しい情勢の中、地質調査業としてどう関わり合っていくか、生き残るための企業戦略など、早急に対応を図る必要性を説いていた。

5. 展示会

会場の一角に設けられたブースには、中国地質調査業協会をはじめ合計15団体が参加して行われた。一般の機器やソフトの展示に加えて、今年の見玉はバスサイズの移動ラボ「ジオ・フレンド」の展示であった。

他にも環境関係の展示が多く、時代の流れと関西地区での先進ぶりが感じられた。



ジオ・フレンド(地盤環境調査試験車)

特にボーリングオペレータの後継者問題と将来展望の発表では、上記したような現場の工夫の必要性とも併せて現場環境改善の問題、若手に希望を持たせて積極的に仕事に取り組めるようにするために必要な事などが熱く話された。

東北地質調査業協会でも若手セミナーなどでオペレーターとの交流が続けてきている。今後ますます重要なテーマであると改めて感じた。

おわりに

1日目の夜に行われた技術者交流会も、お隣島根県の「安木節」が披露されるなど、鳥取の美人とともに華を添え、大変結構なものでした。

ただ一つ残念だったのは、現地見学会が企画されなかったことである。半ば観光ができると思っていた自分としては、悔いが残っています。

最後に、参加の機会を下さった協会と、慣れない旅先で弥次喜多道中につき合って頂いた秋山氏、佐藤氏はじめ協会員の皆様には、この場を借りて厚く御礼を申し上げます、参加報告といたします。

6. オペレーターセッション

オペレーターセッションでは7編の発表があった。シンウォールサンプリングの例では、滑車の原理を利用し、1回の押し込みで80~90cmを押し込めるようにした「2倍君」が紹介された。

また、半自動落下装置の改善、特定深度での地下水の採水機器の開発、仮設時の作業環境の改善策などが紹介された。